

気候変動と植物

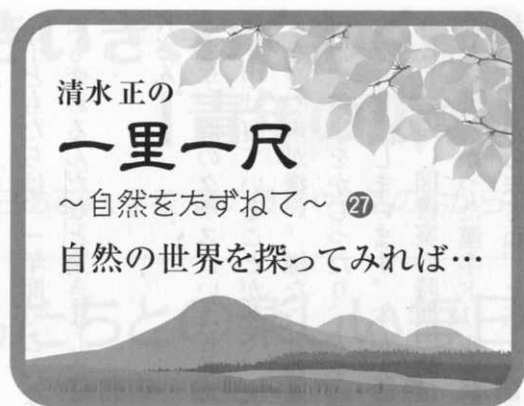
今年、スーパースーパーエルニーニョの
関係とかでヨーロッパ諸国は熱波
に襲われています。フランスやド
イツでは四〇度を超える日が続出、
スペインでは四五度の日もありま
す。これを日本に当てはめると緯

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ 27

自然の世界を探ってみれば…



度で言えばフランス、ドイツ、イ
ギリスは北海道北端の稚内よりも
北にあります。スペインやモロッ
コでも東北地方です。当然、今ま
では涼しい夏でエアコンなどは必
要としていなかったのが、高熱で
死ぬ人も出るという殺人的気候で
す。当然この気候変動は植生にも
大きく影響を及ぼします。

一つ一つの花を見ていくとどう
でしょう。かつて現職の新採だつ
た時、四月末頃から家庭訪問があ
り、ゴールデンウイークを挟んで
後半の訪問時にはフジの花が咲き
だしていました。それから二〇年
ほど経ってゴールデンウイークの
頃に満開となり、退職間際の頃
には訪問週間が始まる頃にフジが咲
いていました。あまりにも急速に
温暖化が進行するため開花の時期
を変えることによって生き延びて

行こうとしているようです。

太古の日本は氷期が終えて縄文
海進といわれる温暖な時期があり
ました。縄文海進とは地球が氷期
を終え、温暖化により海水面が上
がり陸地が海に没して言った事を
さしての呼び方です。まさに京都
盆地が大阪湾になった頃です。し
かしこの時の温暖化進行速度は現
在の温暖化より緩やかで、幾つか
の植物たちは冷涼なところを目指
して移動をしたと言われています。
日本も梅雨入り前は暑い日が続
き、毎日三〇度を超え真夏にはど
うなるだろうと恐ろしい思いをし
ながら観察会を開いていましたが、
街を外れ木々に囲まれた山里に入
ると、それだけで二・三度下がり、
涼しい風が熱を冷ましてくれます。
谷であったり、尾根であったり、
樹林の中だったり、遅くまで積雪

があつたりと様々な微地形によって植物の開花などにも多様性があるようです。

高島市今津の箱館山は六三〇m程の低山ですが、古くからスキー場があり不思議に滑走期間も長く積雪の多い場所です。ここは六月末から七月初めにかけて多くのヤマアジサイが咲きます。これも多雪のなせる技なのでしょうか。余談ですが山上からは伊吹、鈴鹿の山が遠くに見え、間近に今津・安曇川の里が広がり、海津大崎と竹生島の眺望、遙か西の方角には南湖まで見える大観望です。

「ヒナノ」が付く三つの植物

早春には背の低い小さな花が次から次へと咲きはこり植物好きのものには楽しい日々があわただしく過ぎ去り、初夏に入ると大きな



ヒナノシャクジョウ

花が華やかに彩ります。その時期が終わった頃、実に変わった植物を見ることが出来ました。植物と言えば光合成によって自ら栄養を作り出すものとして、全ての生物の基礎となる生物です。そのため身体には葉緑素を備え緑色をしています。なんと私が見たものは全体が白色でした。ヒナノシャクジョウという小さなもので、花は開いているのですがよく見ないと分かりません。何年前か、花友だちに滋賀県の自生地へ連れて行ってもらったことがあります。



ギンリョウソウ

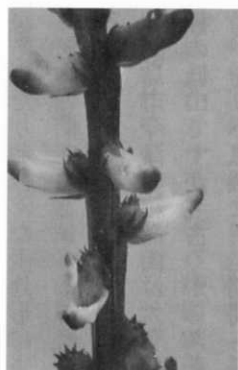
その時も目を凝らすようにして探したことがあります。同じようなものに、葉緑素のない透き通るような白いギンリョウソウというものがあります。これは一〇cmほどの背丈をしていて枯れ葉の堆積したところによく生えていて多くの人が見知っています。今まで、これらの植物は腐生植物と言われ、光合成をせず、枯れ葉など枯死した生物から栄養を搾取している植物とされてきました。しかし最近では、こうした植物をキノコやカビ等の菌類から栄養を奪って生き

ている菌従属栄養植物として位置づけられました。

ヒナノシヤクジョウ、ヒナノカンザシ、ヒナノキンチャク

を探してみよう

ヒナノシヤクジョウを案内してくれた友人が「ヒナノ」と付く植物が三種あるといって教えてくれました。残る二つはヒナノカンザシ、ヒナノキンチャクです。いずれも京都府では絶滅寸前種になっています。図鑑で調べると「ヒナノ」というくらいです。花の形がことはもちろんですが、



ヒナノカンザシ 花

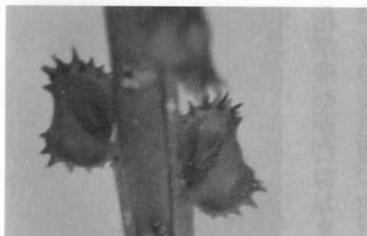
それぞれ独特でオモシロイ。是非見てみたいと思いました。まずはそれぞれの科と属を調べてみました。

ヒナノシヤクジョウ（菌従属栄養植物）：ヒナノシヤクジョウ科
ヒナノシヤクジョウ属

ヒナノカンザシ：ヒメハギ科
ヒナノカンザシ属

ヒナのキンチャク：ヒメハギ科
ヒナのキンチャク属

取りあえず分布域や生育場所の



ヒナノカンザシ 実

特徴とともに入れたおき、条件に合う場所へ出かける時は探すようにしま

した。

ヒナノ

カンザシは低山歩きをして

いる時、この辺りにひよつ

としてと



ヒナノキンチャク

思い丁寧に探すと、一つ見つかりました。見慣れると意外に沢山の株が見つかりました。実物を見て目が慣れると分かってくるものですね。ワラビ採りに行つて一本見つけると、目が慣れて次から次にみつけれらる。私たちは俗に「ワラビ眼」などと言っています。それは何事にもあるようです。二度目に見つけた場所はいろんな人が出入りするごく普通の場所で、「アレツ」という感じで偶然にも

見つかりました。しかし、後日行くと広大なところのピンポイントで探すのはやはり目を皿のようにして探さねばなりませんでした。

ヒナノキンチャクは、皆さんが拙稿を読んで頂く頃どこかで密かに咲き出していると思います。この花を見れば、巾着と名付けたことに納得されると思います。小さいながら鮮やかなピンクと黄色、そして一花一花がなんとも可愛らしい形です。これらの花を見るときは是非ルーペを用意してください。感動の度合いが倍にも三倍にもなります。

図鑑の目次で出だしの言葉が同じものが三種あり、いずれもが希少種、簡単な図鑑では載っていない。探すに値するミッシェンといえます。こういった楽しみ方があってもいいなと思った次第です。

これが「イヌ」や「アカ」や「シロ」で始まるものなどではないっばいあって大変です。また普通種であつても、そこら辺ですぐに見つけられて簡単すぎます。少し本筋から離れてしまいました。

どうして起る

鹿害、猿害、シシ害、熊害

ヒナノキンチャクを見た所では、他にも珍しいものを見かけることができました。一つ紹介しておきます。マネキグサです。良くある唇形花で、くすんだ紅紫色ですが、花弁の縁に白い縁取りがはいっています。しかし最近ではシカの食害によってほとんど見られなくなつたということです。伊吹山の鹿害は相当深刻で、鹿害で植生が壊滅状態となり土砂崩れが頻繁に起こり、登山道が寸断され入山禁

止になつていゝことです。希少種というものがある地域に集中的に存在をし、

俗にホットスポットなどと呼ばれています。しかし鹿害は特定地域に集中するのではなく、至るところに起こり自然とかわる全ての人を悩ませています。昨今ではシカばかりでなく、ニホンザルが高山に現れ高山植物のみならずライチョウへの被害も増加しています。そしてここ二三年ではクマの市街地への出現が話題になりアーバンベアー等の言葉も飛び交っています。そろそろ、膏葉貼りのよう



マネキグサ

な個別対処ではなく、開発・気候変動・林業や農業政策など自然と人間のありようを大きく捉えた集団的英知が求められていると思います。

キノコの沼に はまってみよう！

拙稿がみなさんの手元に届く頃、山や里には夏のキノコが沢山見られます。キノコという怖そうに腰が引けてくる人が多いですね。それはキノコを食べる対象と思う

から、毒キノコがあるし怖いと思ったりして手を出そうとしないのでしょうか。口にしなければ多くの毒キノコでもあなたに害を与えません。子どもたちは無邪気なもので大人から毒キノコ毒キノコといわれなければ、次から次へとキ



キノコ ノボリリュウタケ



キノコ アカイカタケ



キノコ スジオチバタケ



キノコ ツマミタケ



キノコ ツチグリ

ノコを見つけてきて、おもしろがります。子どものように広く受け入れればキノコほど様々な形、様々な色相があつておもしろいものはありません。一つ一つのキノコの名前が分かり、食毒が分かればより楽しいかもしれません。そうなるには相当ハードルが高い。そんなこと気にせず、不思議な形のものをついばい見つけ、パレットを並べるような色を沢山探し、唯々ビジュアルの世界を愉しんでもいいではありませんか。それこそワンダー・ワールド。夏から秋へ。キノコの沼にはまってみよう。